



#09

かむなるンロ



著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

間が悪い、という事はあるものだ。
たとえば向こうから来た自転車避けようとして右に移動すると、相手も同じ方向に避けてきたりするというような。

そしてさらにそれを避けようと左にハンドルを切ると、相手もそれを見計らったようにさらにハンドルを切ってくるというような。

そしてさらに……を続けた結果が。

「いってて……ごめん、大丈夫？」

藤倉克美は倒れた自転車の横で尻餅をついている女子高生に手を差し伸べた。

お互いそんなにスピードは出していかなかったものの、さすがに正面衝突してしまったせいでダメージはそれなりにある。

「あ、あたし、大丈夫です！ ごごごめんなさいでした！」

「え、あの？ ちょっと？」

女子高生はバネ仕掛けの人形のように飛び起きると、克美が止める間もなく、自転車をこいで通りの向こうに消えてしまった。

手を差し出したままのポーズで固まる克美。周囲の不思議そうな視線がちよつと痛い。

「よっこらせつと……」

克美は倒れていた自転車を起こすと、制服の埃を払ってサドルに跨った。

（あの娘、本当に大丈夫だったのかな……？）

制服は克美と同じ市立城星高校のものだったが、見覚えのない顔だったところをみるとおそらく学年が違うのだろう。あるいは転校生という可能性もある。

黒髪を肩口で切りそろえた、清楚でおとなしい印象の娘だった。

もつとも一瞬しか顔を見ていないので、それぐらいの印象しか持てないわけでもあるが……。

「ん？」

自転車をこぎだそうとした克美は、路上に何か光る物があるのに気がついた。

「ペンダント？ あの子のかな？」

細かい装飾が施された銀色の金属の枠に、青いルビーのような石がしっかりと嵌められている。細い鎖は滑らかな手触りで、肌心地よく馴染むものだった。

克美はそれをしばらく眺めていたが、やがて大切そうにそつとポケットにしまった。

今度学校で会ったらきちんと返そうと思いつつ……。

星霜堂書店。

商店街からちよつと奥まった一角にある小さな古びた本屋。

品揃えはデパートにある大手書店よりは圧倒的に劣るものの、小さい頃から通っていること、なにより店主のおばちゃんの人柄の温かさが気に入っていることもあって、克美が量販にして

いる本屋さんだった。

「こんにちは」

「おや、かつみちゃんいらっしやい」

店の奥からいつものおばちゃんの柔らかない声をする。克美がほっとする瞬間だ。

「にゃー」

奥から出てきた三毛のミイが克美の足にすり寄ってくる。

よしよしと言いながら頭を撫でてやると、ミイは喉をごろ言わせながらうっとりとした様子で目を閉じた。

ここだけは時間の流れがゆっくりな気がする。

克美はミイをじゃらしながらいつも感じるそのことを改めてしみじみと思った。

「そうそう、かつみちゃん、この前頼まれたあれ、入ってるよ」

「うわーあったんですか!? ありがとうございますすー!」

おばちゃんがゆっくりとした動作でレジの奥の取り置き棚から本を出してくれる。

【千の森の物語】

古びたハードカバーの中央には簡素な明朝体でタイトルが刻印されている。本の背には「フ

ジクラカツミ」と付箋が貼ってあった。おそらく取り置き印なのだろう。

遠い昔、聖なる魂が悪魔によって二つに分割され、それが幾重にも輪廻転生を繰り返して出会い、艱難辛苦を経て融合し、また一つの魂に戻っていく……という幻想的な物語だった。

克美が先月図書館で読んで気に入って、ぜひ原書でも読みたいと思って、日本語訳と原文が併記してあるこの本を注文したのだ。

「嬉しいなー! もう絶版でしたし、ネットで調べてもどこにも在庫がなくて……ほんとよく手に入りましたねー?」

「うふふふ、本はね、それが必要とする人の手許にちゃんと行くようになってるんだよ」

おばちゃんはそう言って微笑んだ。

そういえばここで頼んで手に入らなかった本は一冊もない。考えてみれば不思議なことだ。

「あれ? もしかしてさっきの……」

背後からした驚きの声に克美が振り向くと、そこには先ほど自転車でぶつかった少女の姿があった。

突然の邂逅に克美と少女は言葉失ってしばし見つめあってしまう。

「おや、お嬢ちゃん。いいところに来たね。さっきちょうど頼まれた本が入ってきたところだよ」

おばちゃんがにっこりと微笑んで少女に本を差し出した。

そこに刻印されていたのは『千の森の物語』というタイトル。

そして「フジクラカツミ」という付箋だった。

「あれ？ おばちゃん、なんで2冊も……？」

「不思議なこともあるんだね、かつみちゃん。そちらのお嬢ちゃんも『フジクラカツミ』ちゃんなんだそうだよ」

「え？」

おばちゃんはさらになつこりと微笑み、元からの細い目がまるで糸のようになった。



「えっと……さつきはごめんね。大丈夫だった？」

「あ、はい。あたしの方こそごめんなさいです。あたし、本当に運動ダメで反射神経ゼロで……」

家の方向が一緒だということで、二人は夕暮れに照らされる川原の土手の道を、自転車を押しながら歩いていた。

少女は克美の第一印象と同じく、おとなしく穏やかな雰囲気まどを纏まとっていた。肩口で切り揃えられた黒髪が、歩みに合わせて静かに揺れている。白い肌との黒髪のコントラストは、どこか

日本人形を連想させた。

「でもめずらしいね。同姓同名なんて」

「はい、わたしもびつくりです」

「もしかして遠い親戚とかだったりして？」

「親戚だったら同じ名前は大ぶんつけないですよ？」

「はは、そうだね。言われてみればそうだ」

克美は快活かいかつに笑った。少女もおかしそうにそれに合わせてクスリと微笑んだ。

「その本好きなの？」

「はい。先月図書館で読んですっかり気に入ってしまったのです。だから原書でも読みたいと思つて、日本語訳と原文が併記してある本を探していたのです。でもネットでも古書店でも見つからなくて、途方にくれていた時、星霜堂書店さんに出逢ったのです」

「へ、へえ……」

本に出逢であう経緯けいゐまで克美と全く同じだった。

ここまで同じだと何か運命的な物を感じざるを得ない。

……が、そんなことを言つて女の子を引かせてもしようがないので、喉まで出かかったそれを克美はぐっと胸の奥にしまい込んだ。

自意識過剰と思われてもイヤだし……。

「藤倉さん……なんだか自分呼んでるみたいで変な感じだな……はどこのシーンが好きなの?」

「あたしは断然、キリがシンのために死ぬシーンです。あそこは……何回読んでも泣けるのです」

「本当に? 僕もだよ! キリの流した血によってシンが竜の呪縛じゆばくから解放され、青く濁にごった瞳が本来の紅あかさを取り戻すところだよな? そのシーン、僕もすごい好きなんだ。なんていうか、魂たまが震ふるえるっていうか……」

「はいです、はいです! わかります、わかります!」

少女は白い頬ほおを朱しよに染めてこくこくと頷うなずいた。

(……好きなシーンも一緒なんてやっぱり……でも、あそこが実際一番ぐつとくるところだしな……)

「あの、変なこと訊きますけど……」

「ん?」

「藤倉さんって……ほんとだ、なんか自分呼んでるみたいで変な感じですね……乙女座おとめざなんですか?」

「うん、そうだけど?」

少女はハツとした表情を浮かべる。

そしてしばらく躊躇ためちった後、こう続けた。

「乙女座でB型で羊年なんです!」

「う、うん、そうだけど……なんで知ってるの?」

「……あたしもそうなんです」

二人の歩みが止まる。

夕陽はすでに大きく傾かたむき、二本の細長い影が河原へと伸びている。

「もしかして9月28日生まれ?」

克美と少女は同じ問いを發した。問いは同時に答えてもあつた。

少女の目が大きく見開かれ、克美もこくりと息を呑のんだ。

ここまで偶然が重なるなんてあり得ない。もしかしたら。

本当に、もしかしたら。

「ま、まさか……」

「はい?」

克美の声は少し震えていた。

だがやがて意を決して口をひらいた。

「もしかして藤倉さんもバクチャー好き?」

「嫌いです！」

克美の問いを、少女は即座に否定した。

若干食い気味ですらあった。

「あ、ごごめんなさいです！ でもバクチャーってベトナム料理とかに入っているあの香草ですよね？ あたしあれだけはどうにも苦手です……いつも残すんです……。藤倉さんはあれ好きなんですか？」

「ぶっ」

「はい？」

「ぶっ……くくく、あははは」

「はい？ はい？」

突然笑いだした克美に、少女は戸惑はまどっておろおろする。

「いや、あはは、ごめんごめん。僕、バクチャー大好きなんですけど、今までバクチャー大好きってやつに出逢ったことなくてさ。それでもしかして、って思ったんだけど……そりゃそうだよね、あれクセあるしね。でもそこが美味しいとこなんだけどなく少数派なんだよな」

愉快そうに笑う克美を見て、少女もほっとしたようだ。

（……運命かもって思ってたですけど……やっぱり違う人間なんですわ……そうですよね……）

少女はがっかりしたような、ほっとしたような、少し不思議な気持ちになった。

「あ、そうだこれこれ。今度学校に持って行って返そうと思ってたんだけど……ほらぶつかった時に落としたやつ」

「あ！ やっぱり落としてたんですね！ ありがとうございますー！ あそこに戻ってずーっと探してたんですー！ それ亡くなった祖母にもらった形見で、失くしたらどうしようって思ってた……」

「そうなんだ、お祖母ちゃんの形見なんだ。これってすごい高価なものなんでしょ？ このルビー……なのかな？ の紅がすごいきれいでさ。すごい引き込まれる不思議な色だよね」

克美はにこやかにそう言って少女にペンダントを手渡した。

少女が驚愕きょうがくのあまり、言葉を失っていることにも気づかず。

そう、ペンダントは紅く輝いていたのだ。

確かに、紅く輝いていたのだ。

まるで呪いから解かれたシンの瞳のように。